平成２５年度実施
東北大学大学院情報科学研究科
博士課程前期入学試験問題
(2013 年 8 月 28 日)

専門試験科目
(外国人留学生)

言語・メディア群

注意

○ 以下には、専門科目５問題が印刷されている。

○ 受験者は、そのなかから**２問題**を選んで、答案用紙に解答すること。

○ 問題１を選択した場合には、指定の解答用紙を使用すること。それ以外の問題を選択した場合は、答案用紙に問題番号を記入すること。

○ 問題５－１あるいは問題５－２を選択した場合には、辞書を使用しても構わない。ただし、辞書は出題者が用意したものを使用するので、必要な場合には試験監督に申し出ること。

○ 試験終了後、答案用紙に加えて、この問題冊子も回収する。

問題　1

「表現」、「責任」、「他者」の３語をキーワードとして、各自考えるところを600字以上800字以内の日本語でまとめなさい。その際、キーワードは３語とも用い、題名をつけて、首尾一貫した論理で記述しなさい。（この問題を選択した場合は、指定された解答用紙に記入すること）

問題　2

1995 年以降のメディアテクノロジーの変化に関して、以下の領域のなかからひとつを選び、その領域に与えた重大な影響とそれに関するあなたの考えを、日本語または英語で論じなさい。その際、選択した番号を明記しなさい。

1．経済活動

2．政治・市民活動

3．法律・倫理

4．コミュニティ・人間関係

5．芸術・文学

問題　3

日本を代表する現代のアーチストである村上隆は、「Super Flat 宣言」（2000 年）の中で、現代の日本文化の特徴として、（1）子供的価値観、（2）豊かさのレベルなき社会、（3）アマチュアリズム、の三点をあげている。

これを参考に、あなたの考える現代の日本文化の特徴を具体例をあげて、日本語または英語で説明しなさい。。

問題４

次のページの文章をふまえ、芸術によってどのように世界を表象しうるかという問題について、絵画以外のジャンルの具体的作品を例に挙げて日本語または英語で論じなさい。なお、文中の「ロスコ」とは、ロシア生まれのユダヤ人で少年時にアメリカへ移住した画家マーク・ロスコ（1903－70）をさす。

第二次世界大戦下の一九四三年、ロスコは友人アドルフ・ゴットリープとともに、つぎのような声明を新聞紙上に発表していた。声明は全部で五項目からなるが、最初の三項を掲げておく。

われわれにとって芸術は見知らぬ世界への冒険である。その世界は喜んで危険を冒さんとするものによってのみ、探検されうるのである。

この想像力の世界は自由奔放であり、暴力的に世界に対立する。

観客に彼のやり方ではなく、われわれのやり方で世界を見させることは、芸術家としてのわれわれの機能である。

（『ニューヨーク・タイムズ』六月一三日）

断固たる決意表明である。

この時期ロスコは具象的な人物群像やニューヨークの地下鉄駅構内の情景などの写実的な作風からようやく抜け出し、シュルレアリスム的な絵に専念していた。数年後にはまったくの抽象に進む。ゴットリープはより直接に暴力と死と恐怖を暗示する象徴的イメージを描いていた。二人は、ジャクソン・ポロック、ポール・ニューマン、クリフォード・スティル、ウイリアム・デ・クーニングらとともに、大恐慌後から戦中のきびしい社会を生き抜き第二次世界大戦後に抽象表現主義を担った仲間である。

二人ともまだまだ自己の独自なスタイルを探り当てていない時期であるのに、芸術に対する信頼と自負心は、すでに確固たるものがある。ロスコらは、芸術とは、危険を冒して見知らぬ世界を探検することであり、見出された世界に自分たちのやり方で表現を与え、人々に新しい世界を見させることだと言う。ここまではっきり芸術の意義と機能を最初から自覚している画家は少ないだろう。抽象表現主義の画家たちがその後に見つけたスタイルは各人各様だったが、この声明にあらわれたような勇敢さ、自由奔放さ、絶対的な自負心はかわらなかった。

それにしてもかれらの探求すべき「想像力の世界」つまり芸術の世界は、なぜ自由であると同時に「暴力的に」常識の世界と対立しなければならないのか。その後のかれらの仕事がおしなべて暴力的なものを感じさせるのも事実である。

この声明が発表された時期に注目したい。アメリカは戦場になったわけではないが、未曾有の大量の死者を出した戦争のさなかに出されているのである。ゴットリープらは三〇年代のベン・シャーンらの描く不安な都市生活の写実的情景ほどにも社会の現実にふれることはなく、芸術の力だけを信頼して見知らぬ世界を探求しようとした。だが現実から身をもぎ離そうとするかれらのヒロイックな身振りのなかに、かえって、遠方で現実に起きつつある人類の悲劇への直感、あるいはまもなく現実となる悲劇への予感を読み取らないわけにはいかない。災いはまさに進行中であった。

出典　持田季未子『芸術と宗教』岩波書店、一九九七年。

問題　５

以下の問題５－１（ドイツ語）、問題５－２（フランス語）のうちから 一つ を選択して解答しなさい。なお、この問題を選択した場合には、辞書を使用しても構わない。ただし、辞書は出題者が用意したものを使用するので、必要な場合には試験官に申し出ること。

＊この問題を選択した場合には、解答用紙左上にある「問題番号」の欄に「５－１」あるいは「５－２」と記入すること。

問題　5－1

以下のドイツ語の文章を日本語に訳しなさい。

Wer über elektronische Medien schreibt, muss notwendigerweise zunächst Marshall McLuhan (1911-1980) erwähnen. Er hat als erster philosophisch über die Medien nachgedacht und war zutiefst von ihren Möglichkeiten überzeugt. So stellte er sich auch die zukünftige menschliche Gesellschaft als ein „globales Dorf" vor. In diesem weltumspannenden Dorf verlören die großen nationalen und auch die kleinen sozialen und tribalen Grenzlinien allmählich ihre Bedeutung. Die ganze Welt würde sich dann in Richtung einer einzig(artig)en, universellen, konvergenten Ansiedlung entwickeln.

Heute sagen viele etwas Ähnliches, wenn sie über das Internet reden. Tatsächlich sind wir in einer historischen Phase, wo sich Informationen, Dinge und Menschen grenzenlos bewegen können. Bis vor kurzem gab es nur wenige, die Japan verlassen oder sogar ihr ganzes Leben außerhalb Japans verbringen konnten. Heute ist das selbstverständlich. Wahrscheinlich werden die meisten von uns in zehn Jahren wieder an einem anderen Ort leben, weshalb die Bedeutung von Landesgrenzen oder lokalen Gemeinden rapide sinkt. Und diese inter- oder transnationale Welt samt Internet ähnelt tatsächlich dem globalen Dorf. Allerdings müssen wir genau hinsehen. Schon in den 90er Jahren gab es auffällig viele ethnische und nationalistische Bewegungen, und auch gegenwärtig nehmen ethnische Konflikte an Häufigkeit und Heftigkeit zu.

※出典：Ulrich Heinze (ed.): Japanische Blickwelten, Bielefeld 2013.

問題５－２

以下のフランス語の文章を日本語に訳しなさい。

Au quotidien, nous percevons notre environnement comme un espace naturel, allant de soi. Nous y sommes tellement habitués que nous ne portons guère attention à ce qui nous entoure. Pourtant, presque tout ce que nous voyons, presque tout ce que nous croisons sur notre chemin, dans une ville, a été façonné par les hommes et relève d'un passé proche ou lointain. Des artistes sont parfois intervenus dans ces espaces publics qui composent notre univers. On peut voir leurs œuvres dans les rues, sur les façades, sur les places, dans les jardins. Ce sont en général des sculptures de pierre, de bronze ou de tout autre matériau qui résiste aux intempéries, ou encore des peintures murales.

Il peut être amusant de repérer, par exemple, toutes les sculptures se trouvant dans sa ville ou son quartier. Où se nichent-elles ? Sur quels portails, sur quelles fontaines ? Sur quels bâtiments ? On peut en faire la liste, les décrire, puis les classer : par matières, par tailles, par styles, en observant tout ce qui permet de rapprocher une œuvre d'une autre. Se concentrer sur quelques éléments singuliers de notre ville nous permettra de la redécouvrir. Et l'on remarquera alors des miliers de détails qui nous avaient échappé.

出典　Catherine Lobstein, *L'art : une histoire.* Paris : Éditions Autrement et CNDP, 2005.

平成２５年度実施
東北大学大学院情報科学研究科
博士課程前期入学試験問題
(2013 年 8 月 28 日)

共通外国語科目
(日本語)

言語・メディア群

○ 試験終了後、解答用紙に加えて、この問題冊子も回収する。

問題

あなたが自分の研究を進める上で重要だと思う本を一冊、日本語で紹介しなさい。その本は、日本語のものでなくても構いません。